

雑詠日記

徐山猿声

卷の五

一九九二年

市井一人

「ムウサの神々から授けられる神がかりと狂気とがある。この狂気は、柔らかく汚れなき魂をとらえては、これをよびさまし熱狂せしめ、抒情のうたをはじめ、その他の詩の中にその激情を詠ましめる。そしてそれによって、数えきれぬ古人のいさおを言葉でかざり、後の世の人々の心の糧たらしめるのである。けれども、もしひとが、技巧だけで立派な詩人になれるものと信じて、ムウサの神々の授ける狂気にあずかることなしに、詩作の門に至るならば、その人は、自分が不完全な詩人に終わるばかりでなく、正気のなせる彼の詩も、狂気の人々の詩の前には、光をうしなつて消え去ってしまうのだ」と、プラトンは『パイドロス』の中で言った。

昔から、このように賢者は詩を作ることの困難さを語っているけれども、私の生まれたこの国の言葉と生活文化の伝統だけは、つぶやきを書き留めることに励ましを与えてくれる。

わたしの心が柔らかくあり続け、魂の汚れを昇華し得ますように。たとえ、ムウサの神々の狂気に至り得ないとしても。

一月一日

くちばしの長い海鳥が迷い込んで来て、助けようとしたら眉間の上をつつかれた。

迷い鳥眉間を叩く年始め

一月四日

年明けの冷たい部屋に花残る心にも咲け新たな年に

正月は薙で飾る佳い植木

(わが家のことではない)

母連れて新年の町見晴るかす百万の人思いは新た

一月六日

密かに尊敬する人の家へ年始の挨拶に行ったら、脳梗塞で入院されていることを知り、見舞いに行く。

訪えば気品ある人病得て言葉失うただ目を合わす

年新た霧湧き上る背振嶺に人みな老いる悲しみを言う

一月七日

水仙の清楚に心動く朝

一月十四日

寝付かれぬままに世界に横たわるわが存在の礎はどこに

飄々何所似

天地一沙鷗

(杜甫)

一月十七日

氷雨打つ紅梅強し花開く

暖房の部屋に季節を盗む花

一月十八日

梯子に乗って庭の百日紅の手入れをしている人を見た。

おお寒い 百日紅を慈しめ

寒風に脆い銀箔冬の月

一月十九日

畑仕事寒の竹林風静か

(家内が借りている一畝の畑の草取り)

一月二十日

銀も銅色も月の色

(満月)

一月二十三日

浮き草の老いの思いは繰り返し流れ漂う寄る辺求めて

(母に)

一月二十四日

人生の悲哀は子供時代からやはりあったと悟る年頃

暖房の部屋で花描くスノビズム

斬新なフォルムを誇るモニュメント夜目にまばゆい都市の生活

一月二十五日

さざ波に陽は巻物を繰り延べて岸辺を歩むわたしを照らす

渡り鳥陽の恩恵に浴す午後

一月二十六日

一畝の菜の花冬と和む野辺

一月二十八日

気がかりだった人の訃報に接す。弔問に行く。

西陵に沈む冬の日言葉伝えよ

白鷺が眠る山辺へ飛んで逝く

一月二十九日

蓑虫が門にすがって告ぐ別れ

葬送もまた経験に 人の生

一月三十一日

ランドセルに梅一枝を挿す少女

二月二日

木瓜植えてみみず驚く 春はまだ

二月六日

春の陽を迎えて赤い杉木立

二月八日

大輪の椿は深い緑持つ

二月十五日

一つ二つ杏の花の愚鈍なる

春探し鴨の編隊降下する

娟々戲蝶・・、片々輕鷗・・

『杜甫詩選』読了。

二月二十一日

心引く雪の綿くず五六片冬と春との境に迷う

「断片」

畏怖すべき牛頭明神

いま眼前に、深いまなこで

白骨に身を変えて

黄色いレモンと

紙風船に囲まれて

想うは何のモチーフ

二月二十三日

早春の風に竹林唱和する

藪椿手折る鎮守の笹の声

春焚火玄海島の影かすむ

夜

雷神の口上都市に春を告ぐ

二月二十九日

連雀と霧雨運ぶ春一番

春雨にコートを被き行く女

三月一日

けぶる雨、今、春、野辺に散り積もる

『子午線の祀り』観た夜寝つかれず頭を西に地球と回る

三月二日

花生ける椿いちりん瓶の脇

三月五日

精と根汲みとる夜に余寒あり

閉ずまぶたくるくるらせんゆめの蝶

世界よ！わたしを満たせ、黙す詩よ

眠りつつ意識の奥にさまよえば無機の願いのことば片々

三月六日

ビジネスのため帰省。FM放送で流しているベートーヴェンの「田園」を聞きながら運転。早春の景色に気分が解放される。

春陽射し山上の霧昇天す

春の陽ににわかに雨が競い合う

遊子敷く若草萌やせ春の雨

田園の歌う「田園」早春賦

和布利浜ツバキついばむ春の鳥

鳥を逐う風車は梅の香を送る

三月八日

早鞆の潮は東に七ノット天の子午線いずこにあるか

春の陽を仰ぎ見ている辻地蔵

ぬるむ水覗くおかっぱ頭の子

ワカサギに糸垂れ春を暮らす人

土筆摘む二人は何を話すやら

野焼きする煙 もの憂いジャズを聞く

白い風石立つ脇の春の幣

壇の浦千珠万珠の丈を越す船が行き交い時は移ろう

春霞人の醜さ包み込みなお萌え出せ奇しき力を

天の原かすむ島影越えてまで遙かに渡せ人の望みを

かすむ山まだ雪抱く高きかな

『子午線の祀り』後編をNHKテレビで観る。

三月十三日

ささやきでコブシを開く春の風

三月十七日

人と犬それぞれの闇菜種梅雨

三月十九日

初姿ツバメの胸のすく飛翔

三月二十日

春分の日。『源氏物語』、ドラマティックな「玉かづら」を読んで気分は
そちらに傾き、また、司馬遼太郎著『春灯雑記』では、「無我」、「五蘊皆
空」ということを考えさせられる。

日の丸の濡れるかたわら椿咲く

六地藏頭巾腹掛け彼岸ぶり

白鷺が肩持ち上げる春の雨

生起してこの身にむすぶこの縁を我が地平から返し広げよ

三月二十二日

林間に春の水音耳澄ます

野の空にツバメが恋を競う時

三月二十四日

靄照らす春の灯一つまた寝入る

三月二十五日

水を汲む音聞く朝は花盛り

三月二十七日

昔受験した大学に来ている。こちらに入学していたら、私の人生もちがったものになっただろう。今のわたしは、結局のところ自分で選び取った進路の先を歩んでいるのだ。

三月二十九日

青年の入りに口で見た並木道花冷えの頃ふたたび歩む

上野の博物館で「曾侯乙墓」展を観る。典雅な編鐘のリズムに身を少し染められて、帝冠様式の本館から一步出ると、外は霧雨で空はうすい灰色の雲で被われていた。玄関右手のユリの大木が大きく広げた枝に出始めたばかりの若葉をわずかにつけている。そのまだ裸の枝越しに表慶館の緑青をふいたドーム屋根が見える。目を地上に移すと、レンギョウの黄色が目にしみる。桃か桜かもあちこちに咲いている。ひたっている優雅な気分正面の池の緑がかった色までが似つかわしい。その向こうの噴水が白く泡だつてひたすら吹き上げている。そして、空の雲にとけ込むように咲き始めた桜の木々。詩的な気分は、美術館・博物館の見物で疲れた体にとどまったままで、言葉の形にならない。

午前中の気分はゆるやかな自由律の詩にふさわしいと思うが、力は及ばず、夜、記憶のために句をいくつか作った。

甲冑が窓越しに見る花濡れる

幾春を湛えて鐘しやうの澄んだ音

緑青の屋根越えユリノキの芽吹き

博物館出ればレンギョウ光の輪

噴水の白い水音花開く

三月三十日

「上野春風」

灯籠を巡る無冠の人と風

散る桃と金箔緑青風に溶け

権現の堂の内なる春の風

葦の間に水鳥を押す春の風

四月四日

まどろんで柳の若葉風慕う

水鳥も花見に集うのどかな日

家捨てた人うずくまる花見かな

暮れる空旋回上昇春の虹

(機中から見た)

黄金のにび色春の空の涯

漁り火の星座や春の響灘

春暮れて漁り火が海に描く記号

(初案)

旅立ちのこのエアポート降り立って春の夜風に歩み始める

目覚めずに逝く人のあり花の雨

古い葉も花々も地に返す雨

四月五日

チエニーの式部を連れて散歩。雨が上がって、やわらかい春の陽射しに野山は、見ているうちにも木々の新芽が若葉を広げている感じ。『源氏物語』、『胡蝶』の巻から読み始める。

野の面のすみれも風に歌うとき

そそぐ陽の一粒ごとがイチョウの葉

四月六日

腕伸ばし山は霞を抱きとる

海峡に光呼びあい春暮れる

「四季」の「春」この身に響く夕間暮れ

花散って夜の川波照りはえる

四月八日

花乱れ木々のいのちはあふれ出て気だるいほどの春の夕暮れ
蝶越える森は若葉の湧く泉

四月十日

潮騒の夜を明かしてしきりなる問いかけ心むねにこだまを残す

四月十一日

唐津湾周航。

島一つ抱いて肌寒春の海

春の山のびやかに描く鷗鳥

帰省。

川行かず淵は静まる木の芽時

四月十六日

蓮華畑花もろともに萌えるもの

四月十七日

おぼろ月ただ一人の遠い旅

(十五夜の白い月)

天地人月のしずくの降るところ

四月十八日

晩鐘が春の嵐を調律す

四月十九日

大茶会に、妻と母と姪について出かける。街の至るところの緑がまばゆいほどだ。寺の本堂の待合いですいぶん長いこと待つ間、それぞれに和洋の装いで、心化粧した老若の女性たちがおしやべりをしている。ひさしの外には光があふれて、楓の新緑が風に揺らいでいる。床の軸に「一華開五葉」、欄間の扁額には「月没夜速去」とあった。

本堂の待合い外は浅緑

万緑のかがやき瞳細くする

おおらかに楠は錦を織り出だす

印象派凌ぐ銀杏の萌黄色

賑やかな春の茶会の待合いに光る風入りさざめきとなる

緋色濃くついに憂いを咲く躑躅

自転車に風従える白き頬

帰宅後、散歩。

村の小さな古いお社

武者絵を飾る宝満宮

格子の内の暗い神の座

一条の春の陽射して

浅い緑の櫛を抱いた

ふくよかな青銅の器が二つ

四月二十三日

とりどりのエビネを春の陽に置けば無心なる美はただ楚々として

眼^{まなこ}持つコウモリ春の日中飛ぶ

四月二十六日

高祖神社へ神楽を見に行く。天孫降臨の日向の高千穂とはここだと古田武彦説に言う。祭神ヒコホホデミ以下…。

緑漏る高祖の宮の神楽殿天つ神の子素朴なる舞

四月二十九日

映画『紅夢』を見に行く。監督は張芸謀。台湾の侯孝賢が制作協力。

『紅夢』観て出れば鷗に光る風

金文字の石柱の脇藤揺れる

五月三日

黒青の龍を黄金の輦に乗せ五月の正午霊柩車行く

森揺する五月の風のうたう歌

五月五日

カメラを提げて散歩。

レンズ越し花吸う蝶と見つめあう

野あざみは黒い揚羽の夢枕

五月八日

熱冷ます雨や若葉は対自する

「人はその行為の系列にほかならない」……ヘーゲル。

五月十二日

歌思沈む外は五月の輝く日

五月十三日

朝曇り夕べ蕾で見たバラの赤い花群いま咲き匂う

五月十四日

咲き誇る花のいのちを賛歌してツバメは川と行く春を追う

曇天の五月の朝

絶妙なヴァイオリンの響き

人生はただこれだけのこと
あるいは、これほどのもの

『源氏物語』、「柏木」の巻、夕霧のくちずさび「あひみむ事は」の注釈
に――春ごとに花の盛りはありなめどあひみむ事は命なりけり（『古今集』、
春下、読み人知らず）――とあった。

五月十七日

涙ぐむ雲井に声を励ましてひばりは熟れる麦畑の上

「精神とは、根源的な想像力です」……カストリアデイス。

五月十九日

放射するバラの輝き花の数

麦刈られ春は居場所を無くす頃

五月二十二日

睡蓮は醒めて楽土に夢うつつ

五月二十三日

チェニーの式部と散歩。前景の水を張った棚田の向こうに遠くタワー、工

事中のドーム球場、博多湾、海の中道が広がる風景を、三脚を据えて写真に撮る。また、水田のそばの桃に白い袋をかけてあり、並んだ杉の幹が映っている構図も撮ってみた。ちょうど徳永寺の六時の鐘の音が林をこえてこちらの丘に聞こえてきた。夕陽が油山の斜面を照らす。

今日植えた丘の田を越え暮れの鐘

用水は溢れて農の季節かな

五月二十四日

咲き惜しむ五月を憂いグミ含む

五月二十五日

卯の花を揺する天雷夜の闇

五月二十六日

私の窓にめずらしい蝶が来て

ひたすらに　こちらを見るよ

日がな一日、

私は蝶と向き合うほどの暇も無くて

はたはたと　漂い歩く

日がな一日、
私はたしかに莊周ではないから
思惟するものは このわたくしで
黒くて太い触角を持つ
蝶ではないと思うけれども

五月三十一日

梵鐘を下げて揺らめく柿若葉

青葉より薨の光る涅槃堂

大屋根の軒守り寺の燕の子

初夏の花梅に捧げる宿り草

釣り人の影泳ぎだす初夏の川

六月八日

こんな時季に萩が咲いた。

梅雨入りに萩の思いは乱れ咲く

時に倦むバラのなきがら雨を待つ

六月十一日
百合咲いて月おぼつかなくも白きかな

六月十二日
感傷の歌突き抜けて皐月晴れ

あくまでも青い銀杏の千の枝

六月十六日
飛ぶことをおぼえた燕の子が 羽を休める喜びを歌い、

世界を見ることを識った雀の子が 語る楽しさをさえずる、

六月 雲低い朝。

三羽の揚げ羽蝶が 互いに挑発しながら空に舞い上がる、

六月 陽照る夕べ。

六月十九日

『陶淵明全集』を読み始めているが、それに誘われてまた戯れに漢字を連ねる。

六月夕陽

斜注油山

青林明処

白鷺高見

油山我庵

住二十年

白首羨望

光鳥遊天

夜、病氣の頃の亡き父の夢を見た。

六月二十日

初夏の田を風滑り行き水光る

六月二十一日

心して刈れや珊瑚はまだ白き

(日曜日。生け垣の刈り込み)

六月二十六日

冷ややかに曇る六月哀調の気分は空と心を占める

六月二十七日

花の粉に指染まりけり梅雨の朝

六月二十九日

朝顔も晴雨計りかね空仰ぐ

七月五日

青蛙わが前を跳ぶ御同行しりとうぎよう

『源氏物語』を読み上げた。その名も「夢の浮橋」という終巻。尋ね行きたい浮橋の向こうは、ゆかしいままに筆を擱く物語の終わりも見事なものだ。名作は、人の心を没入させる。

過去未来超えて浮橋夢の虹

市美術館へ「サンフランシスコ美術館名品展」を見に行く。近代の作品は少ない。しかし、一枚のセザンヌの絵が物の存在を浮かび上がらせ、ルノアールの絵は色彩が生きて動いていることを教えてくれる。J. A. ウードンという人の大理石作りの「ヴォルテールの肖像」は、知恵と口元に湛えたエスプリがよく表現されていて魅力的だ。

紅のモノの花々輝けば濠の睡蓮白く静まる

睡蓮が見上げる杜に城の壁

七月七日

梅雨空に七夕飾るモダニズム

七月八日

夏の田に驚すくと立つ鮮やかさ

ドイツ旅行に合わせてという心づもりで、ゲーテ『イタリア紀行』を読み始める。「この旅行によって詩人ゲーテは完成し、この旅行あつて初めてドイツ古典主義の文学は確立された。この旅行ほど必然的な促しによって実行され、同時にまた偉大な収穫をもたらしたものは、他に比類がないであろう」という解説者の言。私の旅はかすんでしまう。

七月十四日

雲白く緑陰慕う黒い蝶

陶淵明「形影神」。貴賤賢愚、営々として以て生を惜しまざるは莫し、斯れ甚だ惑えり……甚だしく念えば吾が生を傷つけん、正に宜しく運に委ね去るべし。

七月十八日

雨垂れと鐘の音を聴く旅の朝

フランクフルト。カイザー通りを歩いてゲーテ像のところまで。

午後九時の明るいゲーテ像の顔

七月十九日

城跡の窓抜けて飛ぶ夏燕

(カッセル)

午後九時の空を飛び交う燕たち仰ぎ見ながら噴上げを聴く

七月二十日

ゲッティンゲン、ハーメルン。

花盛り夏のドイツのセメトリ―

並ぶ鐘鳴ってからくり 暑い五時

ハーメルンに笛の音聞けど立たぬ足

尖塔の風見は夏の入り日指す

七月二十二日

花々が描く幾何学 蝶の夏

(ハノーヴァー、ヘレンハウゼン王宮庭園)

七月二十三日

方陣のポプラは高く夏の野に

七月二十四日

瓦礫売る猛暑ブランデンブルク門

(瓦礫ができてまだ三年)

七月二十五日

白樺の幹白く 喉渇く旅

七月二十六日

朝顔のゲーテの家に咲く誉れ

(ヴァイマル)

大いなる眼のゲーテが思索した部屋の品々旅人は観る

七月二十六日

― 八月一日 ヴィースバーデン。

二十九日

滔々と流れるライン夏の花

ローレライ事無く過ぎて風涼し

八月二日

ネツカ川釣り人氣長夏入り日

(ハイドルベルク)

八月五日

ネツカ川白鳥八羽打つ鐘の時の数ほど 夏の日落ちる

レヒ川で老尼水遣る花赤き

(フュッセン)

八月六日

白鳥城峨々たる山を降りて立つ

見返れば白い城立つ夏木立

瀧の音や国傾けた夢の城

想念は森の湖に青々と

ノイシュバンシュタイン城を見おろす釣り橋にしばらく佇んで、人間の想いや何やを考えていた。城の背後には緑の野が見晴らせ、フォルツゲン湖が横たわっている。昨晚の宿のそばの噴水が上がっているのもわずかに見分けられる。脚下の瀧の音がとうとうと鳴り響いて時を忘れさせる。はるか右手

八月七日

の山からだろう、ハンググライダーがふんわりと浮いているのが遠くに見える。まるで時空を超越しているかのよう。私の旅も残り少なくなつた。日頃の生活から断絶された三週間の後に、新しい物語が始まるような気分になつてきた。「新しい物語」と何度も呟いてみた。

ミュンヘンからヴュルツブルクへ。

ひまわりの頭は重い　夏盛り

八月八日、フランクフルト。市の広場からゲートハウス。到着の夕べに見たゲート像に別れを告げてカイザー通りを戻り、列車で空港へ。

八月十日

昨日帰国。新しい物語は、妻の全治三ヶ月の骨折で始まった。

蝉嵐これは日の本夏盛り

九月四日

鶏頭の真紅眼に染む残暑かな

九月六日

背丈越す黍刈り取られ野の広さ

九月七日

まどろめば虫の声響く天の内

眠くて何事も進まない。

九月十六日

国中の雀の寄り合い秋日暮れ

九月十七日

庭に咲いた赤と白の萩を部屋に持って来たら、昼頃、思いがけず黄色い蝶がその中から飛び立つた。さなぎが付いていて羽化したものだろう。気分の和む出来事だった。青虫がもう一匹いるから、もう一度見たいものだ。庭の虫の駆除をしないので、萩の花などにたくさん棲みついているのだ。昨晚洗濯物を干すとき見た蝶は兄弟だろう。窓から放つ。

紅白の萩挿し入れた花瓶から黄色い蝶が生まれる不思議

夜、洗濯物を干していたら、今日も蝶がいた。これは、紫色を帯びている。

衣干す身に秋風の沁みる夜

九月十九日

蝶が生まれた。両手に包んで放してやったら、雲間から射し込む朝の条光に導かれるように、空高く舞い上がって行つた。毎日変容できれば、君子と自負してよいだろうが。

生まれ出た蝶は朝日の条光に乗せられて行く天の高みに

九月二十一日

秋空に飛び魚泳ぐ天の底

九月二十八日

秋風も骨身に沁まぬ日々があり草の間に咲くコスモス揺れる

時を掴みきれないときには、秋風が身に沁むというのも習慣的な浅い感覚にすぎない。

一輪車こぎ行く少女赤とんぼ

九月三十日

深々と胸に茶の香や百舌の声

十月八日

秋天を上る鬼グモ頼る糸

十月十二日

金木犀踏んで弁当買いに行く

大いなるひょうたん路傍は秋日和

七時半過ぎ夕食の片付けを終わってゴミを出しに外に出たら、月齢十六ぐ
らいの円い月が「わたしの南山」の稜線の上の方にあつて、その左側を飛行
機雲が長く画して面白い構図に見えた。すぐにカメラを引つ張り出したが、
すでに雲は淡くなっていた。

天分かつ飛行機雲と秋の月

十月十六日

月下美人の花が三つ咲いた。今年はこれで三度目だ。私の鼻が利かぬのか、
香りが薄いと思う。空は月もなく暗い。樫の木から蜘蛛の糸でぶら下がった
枯れ葉が一枚、風でくるくる回っている。句を発しようとするけれども、わ
たしの頭の中もくるくると空回り。

月下美人咲くよ句も出ぬ秋の闇

十月二十日

秋雨はシヨパンの心打つ響き

(ノクターン)

十月二十六日

コスモスも乱れる時や深き秋

十一月五日

霧淡い刈り田の朝の白い鷺

十一月九日

熱秘める桜を朝の時雨打つ

十一月十日

小雨が降りながら朝日が射して半円の虹が立った。虹に向かって進む。

しぐれの朝、虹の堂宇に入りけり

十一月十三日

時に会い桜紅葉を愛でる朝

十一月十四日

小春日や光の海の深き底

とりわけて櫨に朱を置く小春の陽

十一月二十日 時雨降る、我、時、ともに年を古る

遠雷におびえて犬の鳴く夜寒

十一月二十一日 小雪の暮れの鐘の音紅葉の林を抜けて湯殿まで来る

「文学の価値体系のなかでは（人間の）くずやごみにも重要な位置を占める可能性がある」：西川長夫。

「詩は志を言い、歌は言を永うす」：『尚書』舜典、『毛詩』序。

十一月二十九日 日曜の朝の公園小春日の中を少女は一輪車こぐ

残照にまたたく冬の街の灯々

十二月三日 冬晴れは憂さ晴らすほど力あり

十二月五日 街で宝くじを買う長い行列を見た。

極小の確率を買う暮れの列

「空」より得たこの生、暮れの街を行く

十二月八日

用件が果たせぬままに電話口無明見つめる老いた母と子

我、人、衆生、寿者に著せられているのはわたしだ。

十二月十一日

水仙の雪ぐ香りに就くみぞれ

十二月十六日

頬を切り端正にする冬の風

羽細め寒風に飛ぶ白い鷺

十二月二十日

遠く広がる冬の町、あちらこちらに灯火がまたたく、夜の都市の密やかな息づかい、こうして町も年をとっていくのだろうか、思えば歴史遥かな都市。

冬の町賀状書き終え見晴るかす

十二月二十一日 湯の華で冬至を越えて巡る明日

十二月二十三日 初雪が声を励ます「火の用心」

十二月二十八日 風邪の症状に悩まされながら帰省。

成り成りて枝で年越す柿熟す

風車回るくるくる暮れの風

十二月三十一日 老いた母のこの生活は幾分かわたしの暮らしつらく年越す

海を見ず海辺で年を越す日々に何物も見ず眼だけでは

晦に烏ゆるりと家路指す
(こちらの岸から対岸まで内海を越えて)

大つごもり夜警の鈴は急ぎ足

一九九三年正月
徐山亭 謹製

「五月旦作 和戴主簿」

陶淵明

既に來たる たれか去らざらん
人の理 もとより終わり有り
常に居りてその尽くるを待つ
肱を曲ぐるも豈に沖をやぶらんや
遷化 或いは夷險あらんも
志をほしいままにして窟窿無し
即事 もしすでに高くんば
何ぞ必ずしも華崇に升らん

